

ミュンヘンでの生活もいよいよ2年目を迎え、こちらでの生活や仕事にも慣れてきましたが、こんな時こそちょっとした気の緩みから大けがをすることもあったら、あらためて気を引き締めている今日この頃です。

ミュンヘン日本人国際学校では、新たな取り組みとして「国際感覚育成教育」を始めました。

日本の大学と協力して行うこととなったこの「国際感覚育成教育」は、本校教育の中核をなすものとして今後数年間をかけて充実させていくつもりです。そのために今年度新たに日本から採用した先生は、派遣教員とドイツ語教員とが一緒になって取り組んでいくためのコーディネーター役として精力的に活動しています。今回はこの「国際感覚育成教育」の取り組みについて報告します。

ミュンヘン日本人国際学校  
山 本 泰

## 「国際感覚育成教育」とは

本校では、これまでもドイツ語学習や現地理解学習、現地校交流などに積極的に取り組んできました。しかし、いずれも単発的になりがちで、より継続的な取り組みが求められてきました。また、海外にある学校として、その環境を生かしながらどのようにして子どもたちに望ましい国際感覚を身につけさせるかという課題がありました。そこで、これまでの取り組みを統合・発展させていくために、新たに全校で「国際感覚育成教育」として取り組んでいくこととしました。

「国際感覚育成教育」に取り組むに当たって、まず学校として「国際感覚」とは何かを考えました。その結果、「国際感覚」を構成する要素として、以下の3つのものを決めました。

- ① 語学力、コミュニケーション力
- ② 異なる文化、習慣、価値観への理解と自国の文化や事情についての知識
- ③ 主体性、協調性、強い精神力とリーダーシップ

このような知識や能力が、日常生活の中で言動や思考手段として表れたものを「国際感覚」と捉えています。そして、この「国際感覚」を育成するための本校での取り組みの中から、今回は「現地理解学習」と「宿泊学習」を紹介します。



## 現地理解学習 ～異なる文化、習慣、価値観の理解～

現地理解学習は、子どもたちが地域に出かけ異文化に触れることを通して、自分たちの生き方について考えることをねらいとしています。本校では総合的な学習の時間を利用し、ミュンヘン・タイム（MT）と呼んで、毎学期各学年ごとに計画的に様々なところに出かけて学習しています。



7月3日、中学部3年生と一緒に、ミュンヘン近郊にあるダッハウ強制収容所に出かけてきました。ダッハウ強制収容所は、ナチスの強制収容所の中で最も古い強制収容所のひとつと言われ、後に創設された多くの強制収容所のモデルとなったところです。

現地では、収容所として使われていた当時の建物をそのまま残した資料展示館や収容者の住居跡、記念碑などを見学しました。同行したドイツ語担当の先生から聞いた「この収容所は、過去の悲惨な出来事を忘れず、二度とこのようなことを起こさないようにするために残されています。ここは私たちドイツ人のための施設なのです。」という言葉がとても印象的でした。バイエルン州では、すべての子どもたちが必ずここを訪れて過去の出来事について学ぶよう学校に義務づけられているそうです。当日も同年代と思われるたくさん子どもたちに出会いましたが、皆、真剣な表情で説明に聞き入っていました。



その後、ミュンヘン大学を訪れました。ミュンヘン大学には、「白バラ抵抗運動」で知られる、当時ミュンヘン大学の学生であったショル兄妹のレリーフや記念碑、資料館などがあります。大学構内は自由に見学でき、実際に反ナチス運動を呼びかけるビラがまかれたホールの吹き抜けでは、皆が下をのぞき込みながら当時の様子に思いをはせていました。

## 宿泊学習 ～主体性、協調性、強い精神力とリーダーシップ～

例年秋に行われていた小学部5年生以上の宿泊学習を、今年度から春に行くことにしました。その後の学校行事の中で、より一層リーダーとしての役割を果たすことができるようにするためです。

活動の中心は、中学部3年生を中心とする縦割り班を利用した課題解決的な活動です。内容は年によって変わりますが、今年は飯ごう炊飯、ウォークラリー、キャンプファイア、エンブレム制作などを行いました。



本校の宿泊学習の特徴の1つ目は、班員の発表を行きのバスの中で行うということです。事前に係活動などの分担はしておき、自分の班の中での役割は分かっているのですが、同じ班のメンバーとの顔合わせは当日の朝。そこから班ごとの話し合いが始まります。班をまとめていく上での班長の役割は重要なので、班長が感じるプレッシャーはかなり大きく、毎年そのことが感想文に書かれています。

2つ目の特徴は、子どもたちの自主的な活動です。例えば飯ごう炊飯でも、材料や道具の準備は教師が行いますが、火をおこす、ご飯を炊く、食材を調理するなどの活動にはほとんど手を貸しません。それぞれの役割に応じた行動を求め、班長を中心に試行錯誤しながら活動していきます。時間もかかり、時には十分な食事にならないこともありますが、子どもたち同士のつながりは強まっていきます。



本校の「国際感覚育成教育」はまだ始まったばかりですが、これまでの実践を生かしながら今後は職員研修や授業研究会なども行う予定です。研究主任やコーディネーター役の先生を中心に、派遣教員とドイツ語教員が協力しながら研究に取り組み実践に努めていきたいと思えます。